



大妻多摩中学校

二〇一九(平成31)年度

入学試験問題(第二回)

【国語】

時間 50分

2月2日(土)

【注意事項】

- 1 問題は14ページまであります。
- 2 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 3 答えはすべて、問題の指示に従って解答用紙に記入してください。
- 4 句読点やカギカッコは一字と数えてください。
- 5 ページが抜けていたり、印刷が見えにくい場合には、手をあげて知らせてください。

の？」と聞いてあげなければならない。あるいは、「お父さんやお母さんはわかるけど、それじゃあ他の人にはわからないよ」と言っておあげなければならない。

学校でも、優しい先生が、子どもたちの気持ちを察して指導を行う。クラスの中でも、いじめを受けるのはもちろん、する方だつていやなので、衝突を回避^{かひ}して、気のあつた小さな仲間同士でしか喋らない、行動しない。こうして、わかりあう、察しあう、^⑦温室のようなコミュニケーションが続いていく。

あるいは、以下のような問題もある。

全国を回っていると、小学校一年生から中学校三年生まで三〇人ークラス、組替えなしといった地域がたくさんあることに気がつく。こういった環境で、熱心な先生が、表現教育を行おうと張りきって、

「さあ、今日はスピーチの時間です。太郎君、前に出てきてください。先生もみんなもよく聞いているからね、三分間、何喋ってもいいですよ」

と言うわけだが、これでは^⑧スピーチは成立しない。なぜなら、太郎君以外の二九人は、もう太郎君のことをいやというほど知っているから。太郎君も、いまさら話すことなど何もない。少子化^{注2}がボディブローのように効いて、子どもたちから表現への意欲を奪っていく。

表現とは、他者が必要とする。しかし、^⑨教室には他者はいない。

わかりあう、察しあうといった温室の中のコミュニケーションで育てられながら、高校、大学、あるいは私の勤務先のように大学院生になつてから、さらには企業に入つてから、突然、やれ異文化コミュニケーションだ、^{注3}グローバルスタンダードの説明責任だと追い立てられる。

繰り返す。子どもたちのコミュニケーション能力が低下しているわけではない。しかし年々、^⑩社会の要求するコミュニケーション能力は、それを上回る勢いで高まつていつている。教育のプログラムは、それについて行っていない。

子どもたちは、このギャップを敏感に感じ取り、大人になることを嫌がつてしまう。もちろん、大多数の子どもたちは、どうにか

そこは折りあいをつけてうまくやっていくのだろう。しかし、少し心の弱い子は、引きこもってしまったり、ニートになってしまったり、あるいは心を病んでしまったりする。それらは決して、その子の努力が不足していたとは言いきれない側面が多々ある。だって、優しい先生も、優しいお母さんも、異なる意見を持った人とうまくつきあっていく方法なんて誰も教えてくれなかったのだから、みんなわかってくれたのだから。

そのような環境で子どもを育ててしまった以上は、その子どもたちが「どうして、みんなわかってくれないの？」と感じてしまうことを、単純に甘えだと切り捨てることはできないだろう。

（平田オリザ『わかりあえないことから―コミュニケーション能力とは何か』（講談社現代新書）

注1 一義的……最も重要な意味であること。

注2 ボディプロ……ボクシングの用語で、じわじわ効いてくるという意味に使う。

注3 グローバルスタンダード……世界標準・世界的規模で適用している基準や規格のこと。

問1 ———線部①「喋れない」・②「喋らない」の意味として最も適切なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

ア 文でしゃべりたいと思っっているのに、うまくしゃべることができないということ。

イ 気持ちを伝えるのに、意地でも知っっている単語だけでしゃべろうとしているということ。

ウ しつかりと文でしゃべっっているつもりなのに、相手にうまく伝わらないということ。

エ 単語でしゃべることで十分伝わると思っるので、文でしゃべる必要性を感じないということ。

問2 ———線部③「この言語習得の過程が崩れっっている」とありますが、その理由を述べている次の文の空欄に入る言葉を、Aは漢字

二字、Bはひらがな十字で本文中から抜き出して答えなさい。

A を言うだけでも、何を言ったいのかを B から。

問3 — 線部④「無視されるのが関の山」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「関の山」の意味として、最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 当然 イ 冗談 ウ 精一杯 エ 最小限

(2) 「無視される」理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 兄弟が多いと、必ずみんながいつせいにしゃべるのでうるさくなり、単語だけでは絶対に親には聞こえないため。

イ 親でも本人ではないから、子どもの気持ちを完全に理解することはできないので、分からないことをごまかすため。

ウ 兄弟が多いと、親が一人一人に気を配ることが難しいので、単語だけでは何を言いたいかすぐには分からないため。

エ 一人に「ケーキ」をあげると他の子どもにもあげないといけないので、面倒くさくならないように聞こえないふりをするため。

問4

⑤

⑥

に入れるのに最も適切な言葉を、本文中からそれぞれ漢字二字で抜き出して答えなさい。

問5

— 線部⑦「温室のようなコミュニケーション」とありますが、本文で「温室」にたとえられているものとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア いつでもみんな仲良く笑顔で過ごせて、嫌なことやいじわるをするような人がクラスに一人もいない人間関係。

イ 努力や苦勞をしないでいても、周りの人とわかりあえ察しあえるので、嫌なことやトラブルが起こらない人間関係。

ウ 親や先生が何でも前もって準備してくれるので、自分では何も考えたり悩んだりせず言われたとおりにすればよい人間関係。

エ 自分の思いや考えをわざわざ言わなくても周りのみんなが察してくれるので、何でも自分中心に思い通りにできる人間関係。

問 6 ——— 線部⑧「スピーチは成立しない」とありますが、筆者はスピーチとはどういうものであり、なぜここでは成立しないと考
えているのですか。百字以内で答えなさい。

問 7 ——— 線部⑨「教室には他者はいない」とありますが、「他者」の具体的な例を本文中から十字で抜き出して答えなさい。

問 8 ——— 線部⑩「社会の要求するコミュニケーション能力は、それを上回る勢いで高まっていつている」とありますが、この原因
として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 格差社会
- イ 難民問題
- ウ 異常気象
- エ グローバル化

問 9 本文には次の一文が抜けています。この一文の後に続く文の最初の五字を本文中から抜き出して答えなさい。

しかしこれは、もはや家庭だけの問題でもない。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、本文中の表記は原文のままにしております。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

ここにこの山の麓に阿陀仁と云う美しい一人の牧童がいた。毎朝阿陀仁は七八頭の牛を連れて山へ登って来る。牛が草を食う間に、阿陀仁も一緒に草を刈った。牛が寝て、静かに注1反芻をする時に阿陀仁は快くそこに昼寝をした。日が山の頂きに隠れる頃、牛は互に呼び交す。その声に阿陀仁は眼を醒して、刈った草がある牛の背に積み上げる。そして日の暮れきらぬうちに麓へ帰って行く。

山には美しい花が多かった。木の花も、草の花も、阿陀仁はそういう花をたくさんにつみ取った。そしてそれで美しい花束を幾つも作り、中でも最も美しい花束を女神の祭壇に生けて、あとを麓の若い娘達に持つて行くのを例としていた。

三四年経った。阿陀仁はだんだんに美しくなった。山の女神はいつかこの若者を恋するようになった。しかしその時は既に若者にも一人の恋人が出来ていた。それは荒絹と云う機織の名人で、年は阿陀仁より二つ二つ上で、山の女神にも劣らぬほどに美しい娘であった。

阿陀仁が荒絹を恋するようになってからは朝のうちだけは草を刈り、花を摘みなどしていても、昼過ぎるといそいそと牛を追いつ追いつ麓へ下って行くようになった。それまでは摘んだ花の一番美しい一束をいつも女神へ捧げて行つたのが、今は一番美しい一束を別に、次の一束を捧げて行くようになった。

女神の心は楽しまなかった。そうして女神はある日、使っている岩頭と云う山男、——この山男はかなりの年をしながら悪戯者で、夜になるとよく麓の村々をあさり歩き、羊や、鶏や、ある時は魚の肉などを盗み、またある時は酒をも盗んで来るのを仕事のようにしている奴であった。——女神はこの山男から阿陀仁と荒絹との恋を聞いた。そうして荒絹の伯父にあたる年老いた隠者の入智慧でこの恋は最初から絶対に女神には秘めていると云う事を聞いた。その上今荒絹は一念を凝らして美しい一帳のとばりを織っていると云う事、そのとばりの中に阿陀仁と二人入るため、その美しいとばりに包まれた二人は世のいかなる美しい物にも再び眼をまどわされる事のないために、今荒絹は一心にそれを織っていると云う事を聞いた。女神には強い妬み心があった。

女神は荒絹の織っているその美しいとばりを見たと思った。ある晩、それは月のいい晩であった。女神は岩頭の案内で、初め

て山を降りていった。

夜は更けていた。森々ではふくろうが啼いていた。村の家々では皆灯を消してもう寝静まっていた。ただ一軒かなたに窓一ぱいにあかかと灯の映っている家があった。それが荒絹の家である。

女神は岩頭をそこに残して一人静かに進んで行った。近よるにつれ、女神は美しい唄の声を聞いた。機のトントンと云う響がそれに伴奏した。魅するような調子で恋の切ない心を唄っている。女神はしばらくそれに聴き惚れた。しかし女神の心は一層強い嫉妬に燃えた。

女神は聲音を忍ばせて窓の下に近よった。そうしてそと隙間から中を覗いて見た。女神はまず機から流れ出て、床を敷き、更にむこうの壁へその端をかけられた、幅の広い美しい織物を見た。それにはあらゆる美しい花と美しい小鳥とで、少女の恋する心が織り込まれてあった。

女神は次に夢見るような、うっとりとした眼の美しい少女の姿を見た。豊かな頬、張り切った胸、丸味を持った長い指、その若々しさには女神の美も到底及ばないように思われた。

女神は最後にその辺、床一ぱいに撒き散らされた山の美しい花々を見た。

女神の心は二重三重の嫉妬に燃えた。女神はこんな美しい少女を初めて見た。こんな美しい織物を初めて見た。そして阿陀仁との恋。女神はもしこの美しいとばりが完成すれば、もうどんな事をしてもあの牧童を再びこの少女から引き離す事は出来ないと考えた。そして女神はどうかしてこのとばりを完成させぬようにせねばならぬと決心した。

何事も知らない荒絹は夜となく昼となく、心に恋の燃え立つ時、すぐ機に坐った。とばりはもう三分の二以上出来ていた。あと三分の一、それが出来上った日に伯父の隠者は阿陀仁と自分を注4めあわせてくれる。それを想うと荒絹の心はいつも燃え立たずにはいかなかった。

阿陀仁は毎日山からの最も美しい一束の花を窓から投げ込んでいってくれる。しかし隠者の言葉でとばりが完成するまでは一ト言でも二人は話す事を禁じられていた。阿陀仁はとばりを隙見するさえ禁じられていた。

ある夜、もう村中寝静まった頃、荒絹は一人静かに機を織っていると、不意にいやな寂しさに心を襲われた。荒絹は機の手を止め

て眼を閉じた。すると遙か遙か遠い所で何か唄っている。男のしゃがれ声が聴えて来た。それはかすかで何を云っているかは解らなかつた。しかし解らぬままに何だかいやな気持をさす節だつた。

それから毎夜その声は聴えた。その声はだんだんに近く聴えて来た。風の向きで時々その文句も聴えた。それは呪いの不吉な文句だつた。そのとばりを織る事を今止めなければ必ず不吉な事がその身に起るぞ、というような意味だつた。

呪いの唄は夜ごとに近づくように思われた。身のほどもわきまえず、その様なとばりをなお織り続けるなら、お前はいまに蜘蛛になる。そんな意味を唄っている。

荒絹はだんだんに苦しくなつて来た。

⑤ 荒絹はそれが女神の妬みからである事を悟つた。しかし荒絹はそれを伯父にも阿陀仁にも打ち明けようとは思わなかつた。もし伯父に打ち明ければ伯父は機を織る事をとめるだろう。

阿陀仁に打ち明けてもそれは同じであろう。そして阿陀仁は機を止めてすぐ結婚しようと言ふに違はないと思つた。しかし荒絹はこのとばりなしの結婚ではいつ阿陀仁を山の女神に奪い取られるかも知れないと言ふ不安があつた。荒絹はどうしても誰にも打ち明けてこのとばりを完成させねばおかぬと決心した。

荒絹は両方の耳の穴に糸くずを固く詰め込んだ。荒絹はほとんど注5聾者と変りなくなつた。しかし一度その耳の底に浸み込んだ不愉快な呪いの節は耳の中で勝手になおその唄を唄い続けた。ある時は無意識に荒絹自身、口の中でそのいやな唄を唄っている事があつた。

⑥ 荒絹の身体も精神もだんだんに衰えて来た。しかし荒絹は一日も機を織る事を止めなかつた。荒絹には阿陀仁に対する堪え性のない恋しい心が発作的に起る事が多くなつた。しかし荒絹はそれをジツと堪えた。そしてその苦しい心のまま、とばりの完成を急いだ。荒絹は苦しい恋を紫色の花に織り込むようになった。

呪いの唄は夜ごとに烈しくなつていった。紫色の花はだんだん黒味がかつて来た。この頃から荒絹の様子が少しずつ狂わしくなつていった。そして今は毎日毎日黒い花ばかりを織り込んでいた。小鳥の色も黒かつた。華やかだつたとばりは見るかげもない物に

変つていった。それはちょうど美しい布が半分溝泥どぶどろにつかつたように見えた。

荒絹にはあせる心はあつても機を織る気がなくなつた。夕方になるとよく注6、おさを両手に持つてぼんやりと軒下のしたに立つて空を見上げてゐるような事が多くなつた。しかし阿陀仁は一度も荒絹のそう云う姿を見なかつた。そして毎日山を下るとすぐ美しい花束の一つを窓から投げ込んで帰つて行く。⑦美しい花束は徒らたふに溜るばかりであつた。

やがて二月ほど経つた。余りにとばりの出来上る事の遅いおそのを阿陀仁は不思議に思つた。阿陀仁は隠者を訪ねて見に行く事を頼んだ。隠者も半年余りしてまだ出来ないのは少し長すぎると考えた。

隠者は中へ入つてみて驚いた。そこに荒絹の姿は見えなかつた。そして部屋の中は蜘蛛の巣で一杯になつていた。しかも美しいと、ばりは途中からだんだんにきたない色に変つていつて、仕舞しまは全く泥につかつたような色に織り出されてあつた。

窓の隙間すきまから細い糸が戸外そとへつながつていた。隠者はそれを頼りに出てみるとどこまでもそれは続いて、だんだんに山の方へ延びていつた。隠者はついて山へ登つた。そして女神の社まで来ると、そこにむしり、取られたような荒絹の着物の切れ端が落ちてゐるのを見た。

糸は更に山の裏側へ延びていつた。山の裏側は北向きの陽もあたらねば、花も咲かず、鳥も啼なかぬ。⑧景色の処ところだつた。隠者は岩角や木の根につかまりながら中腹まで下りて行つた。そしてそこに一つの大きな洞窟どうくつを発見した。そして糸の続きはその洞窟へ入つていつた。

隠者はその洞窟の薄暗い奥に荒絹が恐ろしい眼をしてこつちを見ているのを見た。荒絹の前には穴一杯の大きさに大きい蜘蛛の巣が張つてあつた。荒絹はまだ何かを織ろうとするかのように、もう糸のなくなつたおさを持つてその手を両方ひつに拮ひげていつた。ギロリと大きく見開いた眼、瘠やせむし衰とろえて妙みょうに細長く見える手足、薄ようごれた皮膚ひふの色、荒絹はもう⑨のように見えた。

(大正六年十一月)

注1 反芻……一度飲み込んだ食べ物をもう一度口の中に戻して噛み直すこと。

注2 隠者……世間の人との付き合いを絶ってひっそりと山野に隠れてすむ人。

注3 とぼり……部屋の中に垂れ下げて、部屋を区切るのに使う布のこと。

注4 めあわせてくれる……結婚させてくれる。

注5 聾者……耳の聞こえない人。

注6 おさ……布を織るときに、縦糸を整え、横糸を織り込むのに使う道具。

問1

——線部①「それまでは摘んだ花の一番美しい一束をいつも女神へ捧げて行ったのが、今は一番美しい一束を別にして、次の一束を捧げて行くようになった」とありますが、ここには阿陀仁のどのような気持ちが表れていますか。具体的に三十字以内で答えなさい。

問2

——線部②「荒絹は一念を凝らして美しい一帳のとぼりを織っている」とありますが、荒絹はなぜとぼりを織っているのですか。その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 女神に邪魔されずに、阿陀仁との恋を永遠のものにするため。

イ 嫉妬深い女神に、阿陀仁との恋をあきらめるように説得するため。

ウ 荒絹の阿陀仁に対する深い愛を女神に一刻も早く知らせるため。

エ 荒絹の方が阿陀仁にふさわしいことを女神に知らせるため。

問3 ——線部③「女神は岩頭の案内で、初めて山を降りていった」とありますが、山を下りて荒絹の様子をのぞき見た女神はどのような決心をしましたか。その答えが含まれる段落の最初の七字を抜き出して答えなさい。

問4 ——線部④「男のしゃがれ声」とありますが、これは具体的に何だったのですか。その答えを本文中より八字で抜き出して答えなさい。

問5 ——線部⑤「荒絹はそれが女神の妬みからである事を悟った」とありますが、「それ」が指し示す内容を具体的に五十字以内で答えなさい。

問6 ——線部⑥「荒絹の身体も精神もだんだんに衰えて来た。しかし荒絹は一日も機を織る事を止めなかった」とありますが、この時の荒絹の気持ちの説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 女神の嫉妬からの言葉が実現するかもしれないという不安と、とぼりがなければ阿陀仁を女神に取られてしまうかもしれないという不安とに悩まされながら、とぼりを完成させようと一心不乱に機を織っている。

イ 女神や醜い岩頭に阿陀仁を取られるかもしれないという不安と、とぼりができあがらないかもしれないという不安とに悩まされながらも、阿陀仁に自分の恋心を伝えるために一心不乱に機を織っている。

ウ 女神の浮気な心に阿陀仁が惑わされてしまうかもしれないという不安と、阿陀仁に自分の気持ち伝わらないかもしれないという不安に悩まされながらも、女神に捧げるために一心不乱に機を織っている。

エ 女神の意地悪な仕返しを恐れているが、自分の作品を仕上げ、達成感を得ることが一番の目的になったので、自分自身のために一心不乱に機を織っている。

問7

——線部⑦「美しい花束は徒らに溜るばかりであった」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 女神によって、荒絹は花を丁寧ていねいに扱おうと思う気持ちをなくしてしまつたから。

イ 阿陀仁の気持ちが届かないほど荒絹の心は病んでしまつていたから。

ウ 自分が美しくなくなつてしまつたことを荒絹は阿陀仁に知られたくなかつたから。

エ 花から感じる阿陀仁からの愛を、荒絹は面倒くさく感じるようになってしまつたから。

問8

⑧に入れる言葉として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 清涼たる イ 華々しい ウ 荒涼こうりょうたる エ 空々しい

問9

⑨に入れるのに最も適切な言葉を二字で答えなさい。

三

次の各問いに答えなさい。

問1 次の①～⑤の文の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① カソウ通貨を購入する。
- ② 図書館のゾウシヨをどんどん増やす。
- ③ 国連総会がニューヨークでカイサイされる。
- ④ 初戦はアツシヨウした。
- ⑤ 資料をセイキユウする。

問2 次の四字熟語の□に入る漢数字を、それぞれ答えなさい。

- ① □ 面楚歌
- ② □ 方美人
- ③ □ 死一生
- ④ 悪事 □ 里
- ⑤ □ 触即発

以下余白

